

## 十五年後の約束

三年 佐藤咲菜

「この先、十五年後二十年後、お父さんやお母さんに何かがあった時、必ずお世話をすると約束できますか？」

今年の冬、母はきつちりと正座をし私と兄に向き合い、こう言った。

私の家には三匹の猫がいた。とても仲が良く、桶型のペットベット・猫桶の中で常に猫団子になっていた。二匹は十二才と十八才で虹の橋を渡り、我が家の猫はメル一匹になった。一匹で過ごす冬は少し寂しそうで、私は新しく猫を飼いたいと母に言った。母もメルのために同じように思ってはいたそうだが、新しく飼った猫が二十年生きると考えると、最後まで自分で世話ができるだろうかとちゅうちよしていた。冬になり、暖かいヒーターの前より、猫桶の中に入るメルを見て母は覚悟を決めた。そして私たちに言ったのだ。

十五年も経てば、私たちの生活環境は確実に今とは違っている。それでも私も兄も「約束します」と覚悟を持って答えた。

今年の一月、保護猫譲渡会へ行き、我が家は新しい猫を二匹迎え入れることになった。

保護猫が引き取られる先の家のことを「ずっとのお家」というそうだ。猫がこの先ずっと安心して暮らせるお家、幸せを願う気持ちがこの言葉から感じられる。

「ずっとのお家へようこそ。」

私はゲージ越しに言った。メルもゲージに鼻をくっつけて挨拶していた。

ゲージの隅でじっとしていた二匹は、その日の夜からニャーニャー鳴き出し、部屋の中に出たがった。保護されてからうちに来るまで大事に育ててもらっていたのだろう。警戒心があまりなかった。ために開けてみると元気に飛び出し、メルの入っている猫桶に納まり、あつという間に猫団子になった。今年の冬は猫桶で三匹がぎゅうぎゅうになって幸せそうに眠っていた。

かずくん、あめちゃんと名付けた二匹、名前より、「おりこうさん」「かわいこちゃん」と呼ぶことが多かった。ご飯を食べたらおりこうさん、トイレに行ってもおりこうさん。寝ている時はかわいこちゃん、毛づくろいしてもかわいこちゃん。夏になる頃には、おりこうさん、かわいこちゃんと呼ぶと返事をするようになってしまった。

最初の頃はガツガツしていて他の猫のお皿に首をつっこんでいたが、最近はお飯を食べる速度もかなりゆっくりになった。必死にならなくてもご飯があるお家、大声で鳴かなくてもしてほしいことをしてくれる人、そんなお家に、家族になれたのだろうか。とても嬉しく感じる。ずっと一緒に幸せに暮らそうね。猫たちをなでながら話しかけた。命に対して責任を持つ。私はその約束をしたのだ。

十五年後、二十年後の約束を胸に三匹の大切な幸せを守っていこうと強く思った。